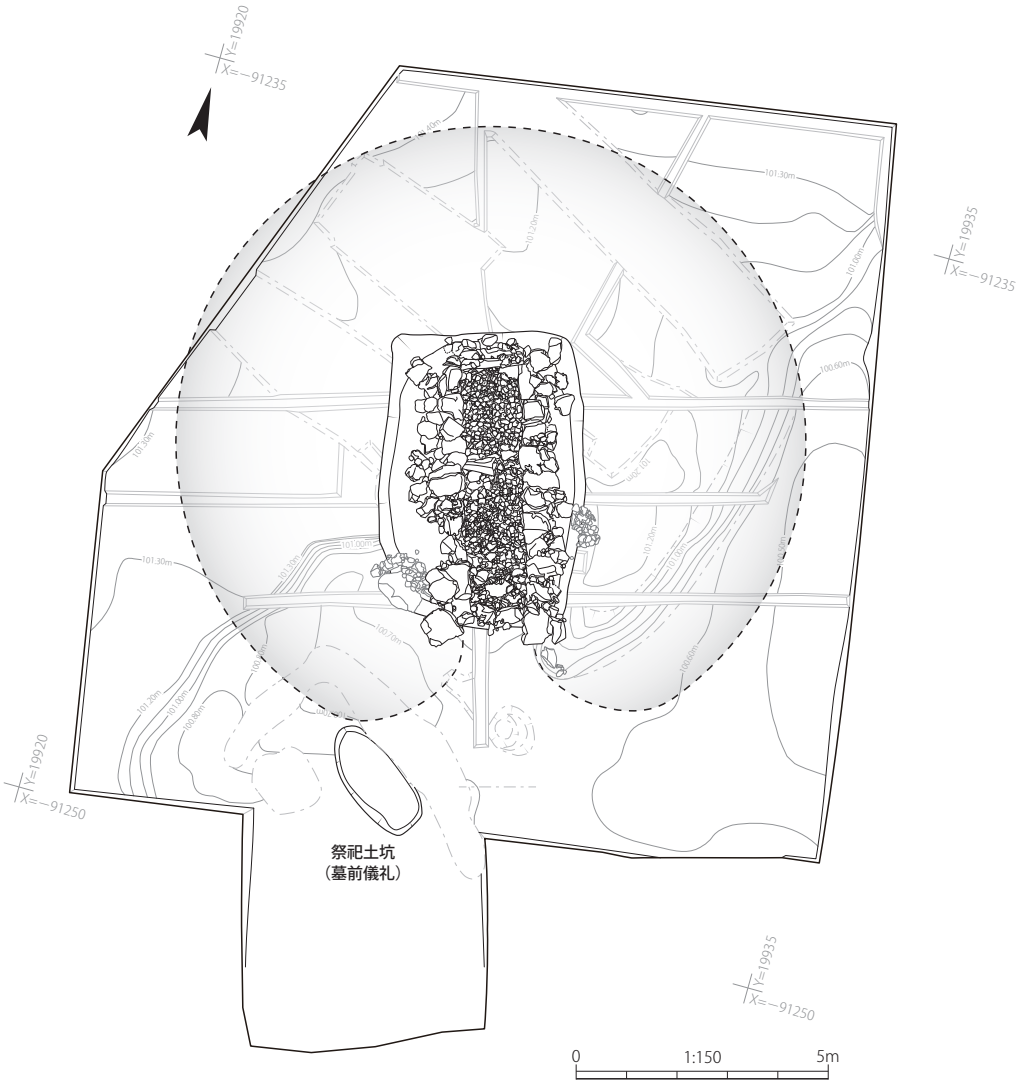
第４章　総　括

石切平２号墳の古墳儀礼と比奈古墳群の地域集団

１　はじめに

静岡県富士市原田に所在する石切平２号墳は、飛鳥時代に築かれた径12.5mに復元できる小型の円墳であり、埋葬施設は開口部に段構造を有する全長5.5mの無袖形横穴式石室である。発掘調査では未盗掘とみられる床面を検出した一方で、横穴式石室という追葬可能な主体部の特性上、調査で検出できた状況証拠の断片から古墳で執り行われた儀礼の総体を復元するには、類例に基づいた解釈や評価を介在させつつ、資料の関係性を丁寧に読み解く必要がある。

本章では前章までに示した状況証拠を基に、調査者の視点において石切平２号墳の古墳儀礼の過程とその特徴を示すとともに、当古墳の被葬者らが属する比奈古墳群の集団構造について分析することで、富士山南麓の地域社会において彼らが果たした役割を考える一助としたい。



第48図　石切平２号墳　墳丘復元図

2　石切平２号墳の古墳儀礼

（１）埋葬・儀礼過程の復元（第 49 図）

石室構築段階の儀礼　駿河東部地域の横穴式石室墳においては、墳丘や石室を構築する前に、平面が長方形となる墓坑を掘削するのが一般的である。石切平 2 号墳においてもその例にもれず、まず側壁下部の石材 1 ～ 2 段分が落とし込める程度の深さの墓坑を掘削した後に、基底石や仕切石を配置し、墓坑埋土や墳丘盛土を背後に充填しながら壁体を積む工程によって石室を構築し、最後に第 1 次床面（初葬床面）を敷設したとみられる。

この第 1 次床面の下部、墓坑上面より須恵器瑞（142）の口縁部の小片が発見されたことで、床面敷設以前のいずれかの段階において、墓坑内で須恵器を打ち欠く儀礼が実施されたことが判明した。この小片が接合した瑞は、追葬時に敷き直された第 2 次床面上へと最終的に置かれていたことから、石室構築時から埋葬完了時まで、石室内で行われたすべての儀礼の一部始終を目撃していた可能性が高い。石室構築に伴う儀礼の催行時期は、瑞や初葬の副葬品群の年代観から、飛鳥Ⅱ（遠江Ⅳ期前葉）とみられる。

初　葬（第１次床面）　石切平 2 号墳の築造契機となった人物の埋葬を初葬と捉えた（第 49 図①）[(1)]。当古墳の石室は、仕切石より奥と手前で石材の大きさを意識的に変えているようであり、奥側に大型石材を多用する傾向にある。仕切石より奥側を主たる埋葬の空間として位置付けていたことは、第 2 次床面において奥側にのみ円礫（玉石）敷きとしている点からも推定できる。仕切石自体に注目すると、西側に立面観の整った石材を選択することで、一見すると箱式石棺の小口のような視覚的効果を狙っていることが推測できることから、奥側でもとりわけ西半部分をこの古墳における最も重要な埋葬の場と位置付けていたとみてよいだろう。耳環（77）の位置から、開口部側に頭位を向けた初葬者の存在が復元できる。

銀象嵌装大刀（80-83）や大型の平根系鉄鏃といった当古墳の主要な副葬品群も、この初葬者への副葬品と考えるならば、東側壁際を中心に配置されたのであろう。追葬以後の副葬品配置が、ある程度初葬時の配置を踏襲したとみれば、仕切石より奥側に銀象嵌装大刀、仕切石周辺に飾弓、仕切石より手前に矢束（鏃群）が配置されたと考えられる。仕切石周辺で出土した鉄製鋲（140）を馬具の一部とみれば、初葬時にはその周辺に馬具が置かれていた可能性がある。また先述した石室構築時の儀礼に使用された瑞（142）が古墳儀礼の最後まで石室内に残されたことから、この瑞と、同時期の所産とみられる平瓶（143）が、初葬時より仕切石手前の西側壁際に置かれていた可能性が高い。

初葬の時期は、銀象嵌装大刀や古相の平根鏃などの副葬品の年代観から、飛鳥Ⅱ（遠江Ⅳ期前葉）とみられる。

追　葬（第１次床面）　第 1 次床面上における追葬者の埋葬位置として、仕切石奥側の東半部分（第 49 図②）と仕切石手前側西寄り（同③）の空間を想定した。②は一対の耳環（78・79）の出土位置から、初葬者と同様、開口部側に頭位を向けて埋葬されたと考えられる。③は 4 ヶ所で断片的に検出した骨片と、一連のガラス小玉からなる装身具の出土位置から復元される被葬者であり、装身具を頸部から胸部付近に着けていたとみれば、この人物も開口部側に頭位を向けていた可能性が高い。③のように石室の手前側で検出される解剖学的自然位を保っていない人骨については、奥側で骨化した遺体を移動・再配置した結果とみる荒井啓汰氏の見解（荒井 2022）も首肯し得るが、後述するように初葬者①に伴う耳環（77）と対となる耳環（76）が第 2 次床面上の同位置にて出土した点から、本稿では初葬者①が床面敷き直し後も位置を変えずに再埋葬された可能性を想定している。

副葬品については、まず追葬者②により減じた奥側の空間において、銀象嵌装大刀がこの段階より奥壁東隅に立て掛けられた可能性が考えられる。東側壁際の仕切石より手前の空間において飾弓や矢束（鏃群）、刀子、馬具が、西側壁際に須恵器が置かれていた可能性が高いが、位置や方向の乱れた出土状況や頸部から折れ曲がった鉄鏃（107・109・112）の存在から、東側壁際の飾弓や矢束は最終的に破砕されたと判断できる。この破砕行為については、第 1 次床面上の追葬者（②・③）の埋葬時の可能性もあるが、それ以後の、第 2 次床面敷設直前の可能性も

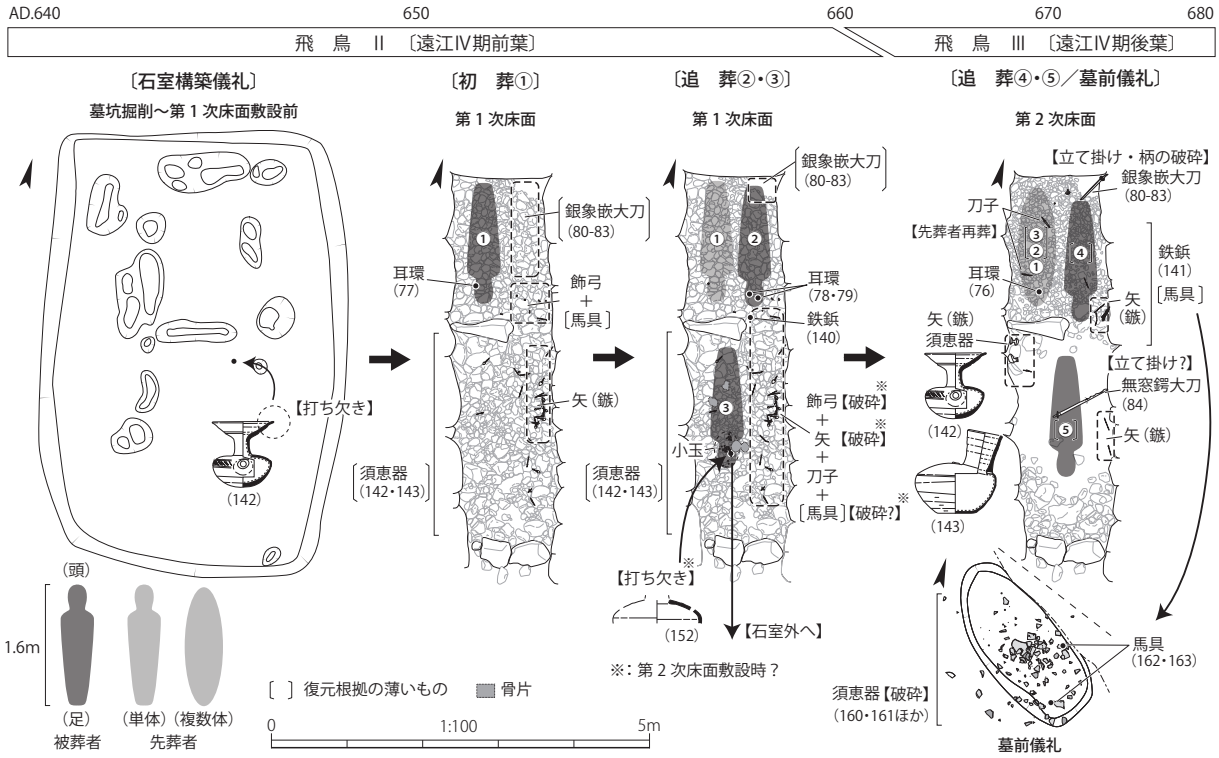
考慮される。また、第 1 次床面上のいずれかの段階において、須恵器長頸壺（152）を石室内、前庭部、墳丘南側と最低 3 回打ち欠いた儀礼が行われたことが、接合関係から推定できる。

先にみた石室構築段階に瑙の打ち欠き儀礼を行っていたという事実からは、普請行為の工程上重要な節目において、当該儀礼が必要とされたことが推定できる。長頸壺の同儀礼や副葬品の破砕についても、第 2 次床面敷設直前に実施された可能性を第一に考えておきたい。

第 1 次床面における追葬の時期は、飛鳥Ⅱ～Ⅲ（遠江Ⅳ期前葉～後葉）とみられる。

追　葬（第２次床面）　仕切石より奥側を円礫（玉石）敷、手前側を床土とする第 2 次床面上においては、まず初葬者（①）のもう一つの耳環（76）や 2 本の刀子の出土から、奥側西半部に複数名分の遺体が片付けられた可能性を考慮し、先葬者（①･②･③）の改葬を想定した。仕切石奥側の東半部と仕切石手前側には、遺物としての根拠に欠けるものの、床面を新たに敷き直した事実より、新たな追葬（④・⑤）がそれぞれあったとみている。最終埋葬者の集骨（改葬）をもって墓室の使用が終了するとした岩松保氏の研究に則せば（岩松 2006）、④・⑤の追葬者の遺体も、最終的には仕切石の奥側等へ集められた可能性がある。

副葬品については、まず奥壁東隅における銀象嵌装大刀の立て掛けと、その木製（頭椎）柄頭部分の破砕が特筆できる。6・7 世紀の古墳における大刀の立て掛け副葬については、日高慎氏の 2008 年の集成によれば全国で 33 例、うち静岡県で 8 例が提示されているが（日高 2008）、その後、原分古墳（静岡県埋文研 2008）、唐沢 1 号墳（静岡県埋文センター 2021）でも確認されており、遠江・駿河は比較的類例が多い地域といえる。日高氏によれば、奥壁隅への立て掛けが最も多く、その副葬意義は棺内に収められたものとは異なり、被葬者や墓室全体を悪霊などから護るため、大刀自体がもつ僻邪の観念をより強固に達成させようとしたものであるという（日高 2008）。本例の場合は、木製柄頭部分を茎端部ごと刀身直下へ叩き落としたような出土状況を呈しており、その儀礼の目的を評価するには慎重を期するが、破砕のタイミング自体も第 2 次床面敷設後の④や⑤の追葬時とは言い切れない。あるいは最後の追葬者の埋葬と改葬が終了し、墓室の使用が完了する段階において、僻邪の役割を無事に終えた大刀を破砕した可能性もあるだろう。



第 49 図　石切平 2 号墳における儀礼の復元

仕切石入口側の無窓鍔付大刀（84）は、検出時には切先を北東方向に向け、石室主軸に対して斜行した状態であった。追葬者⑤の傍らに配置したものが改葬等で動かされたか、東壁に立て掛けていた大刀が倒れた可能性もある。大刀のほかに、尖根鏃を主体とした矢束が、第1次床面よりは少量ながら、東側壁際の仕切石周辺や⑤の東側、西側壁際の仕切石周辺の3ヶ所に最終的に分散して残されている。仕切石の入口側の西側壁際に並べて置かれた2点の須恵器（142・143）は、先述の通り、第1次床面時より石室内に置かれていたものを、再配置したものと捉えられる。

第2次床面における追葬の時期は、飛鳥Ⅲ（遠江Ⅳ期後葉）を中心とする時期とみられる。

墓前儀礼　石室前庭部から3m程南西に離れた位置に設けられた土坑（SK4001）は、覆土内に須恵器大甕や大型平瓶、蓋坏の破片を多数含む状況から、基本的には墓前儀礼等で使用した土器を廃棄した痕跡と評価している。石室前庭部や墳丘南側から土坑周辺にかけて出土する土器片も、土坑内出土の破片と接合するものもあり、墓前儀礼に供された一連の土器群とみてよいだろう。一方で、土坑内には馬具の鐙吊金具の一部とみられる鉸具2点（162・163）があること、石室内には鐙吊金具の部品の可能性がある鉄製鋲（140・141）が、第1次・第2次床面にそれぞれ残されていた状況[(2)]から、当初は石室内に副葬されていた馬具の一部が、墓前儀礼の土坑内に集積された可能性が高いとみている。おそらくは第1次床面での初葬に際して鐙を含む馬具セットが副葬され、矢束などと同様の破砕儀礼によるためか、第1次床面の最終使用時には鋲が外れるような状態となっていたものの、第2次床面敷設後も仕切石周辺の東側壁際に再び配したが、石室の最終使用時までには外へと持ち出され、土坑内に収められたと考えられる。

一連の墓前儀礼の土器群については、積極的に時期差をみとめる根拠に乏しいことから、その時期は飛鳥Ⅲ（遠江Ⅳ期後葉）と考えられる。岩松保氏は、墓室内での一連の行為を、死後の当初は荒ぶっていた故人の魂を、移動・集骨を経て浄化（祖霊化）するための過程と想定しており、予定された全ての埋葬者の祖霊化をもって、大甕の破砕を伴う墓前儀礼が行われるという（岩松2006）。石切平2号墳の墓前儀礼についても、その推定時期から、第2次床面での追葬から最終使用時までのいずれかの段階とみてよいだろう。

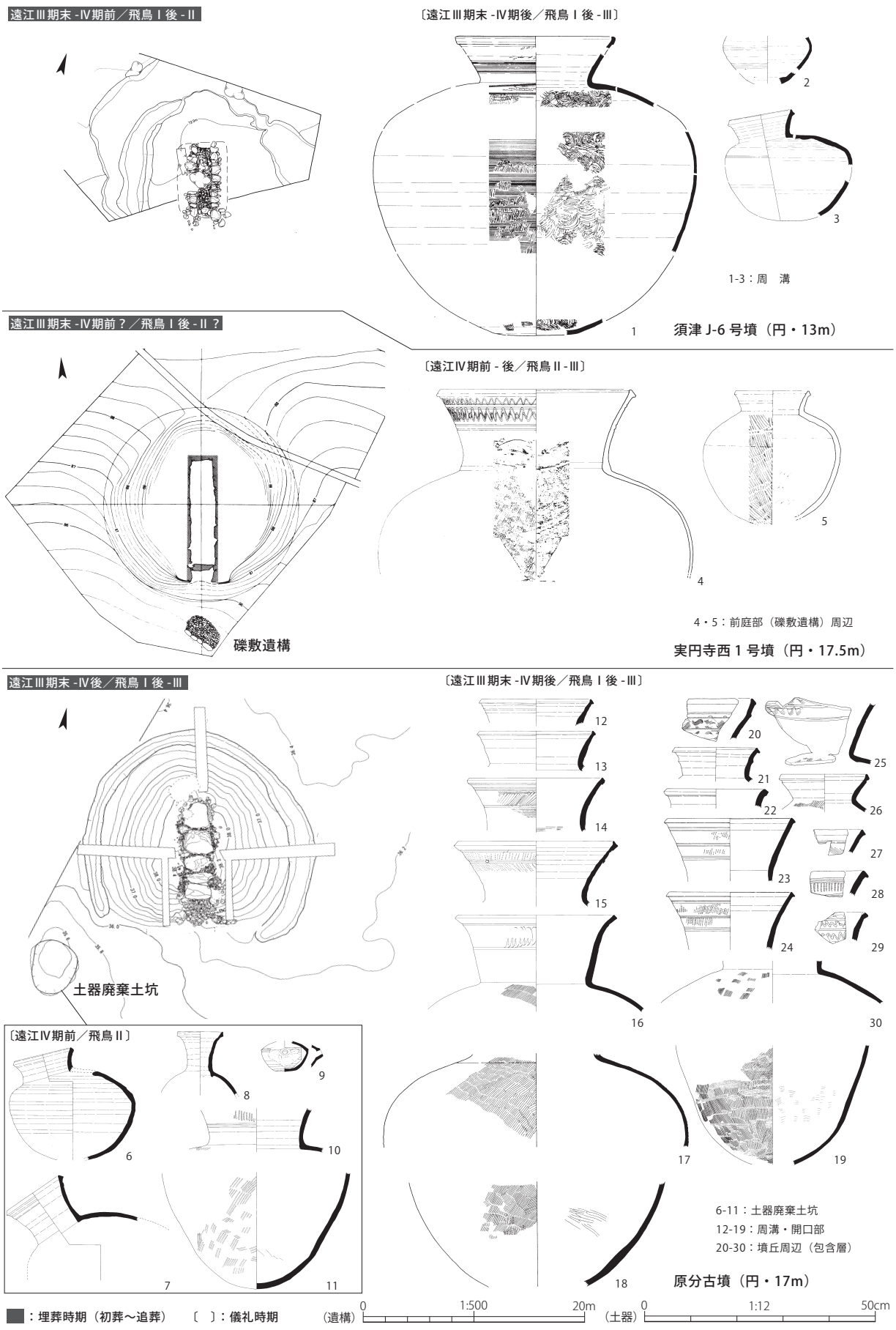
（2）駿河東部地域における墓前儀礼の諸例（第50図）

石切平2号墳で修された墓前儀礼は、駿河東部地域の近似した時期の横穴式石室墳においても認められ、地域に共通した儀礼の存在を想定できる。

実円寺西1号墳　石切平2号墳から約1.5km西に位置する実円寺西1号墳は、駿河東部地域では最大級の全長11.1ｍの横穴式石室を有する径17.5mの円墳であるが、その開口部正面から一段下がった斜面で検出された長さ3.4ｍ、幅1.4ｍの礫敷遺構とその周辺から、口径40cmを超える須恵器の大甕や壺が出土している（富士市教委1986）。礫敷遺構は、斜面下方にやや大型の石材を並べた土留めを伴い、他例のように墓前儀礼で使用した須恵器を廃棄したというよりは、墓前儀礼に際して器物や飲食物を供献するための舞台としての機能を推定できる。

原分古墳　黄瀬川流域に所在し、石切平2号墳から東へ約17km離れた原分古墳は、こちらも駿河東部地域最大級である全長10.6ｍの横穴式石室を有する径17.0mの円墳である。古墳の南西角より長さ4.8ｍ、幅3.9ｍの浅い土坑（土器廃棄土坑）が検出され、細片となった大甕や大型平瓶、フラスコ瓶、瑯が出土した。また墳丘東側や周溝でも須恵器甕の破片が多く出土し、その数は10個体以上に上るとみられる（静岡県埋文研2008）。田村隆太郎氏は土器廃棄土坑出土の須恵器について、石室内出土土器群等とも異なる組成である点に注目し、埋葬とは異なる段階や意図による「酒宴の要素が含まれた墓前祭祀的な儀礼」での使用を想定している（田村2008）。

墓前儀礼と階層性　上記の2例はいずれも飛鳥Ⅰ後半（遠江Ⅲ期末葉）頃に築造された駿河東部地域の最上位層の古墳であり、墓前儀礼に際して設けられた施設は、古墳築造段階（初葬）よりやや新しい、飛鳥Ⅱ～Ⅲ（遠江Ⅳ期前葉から後葉）に帰属する点に共通点がある。石切平2号墳で想定した儀礼過程と同様に、これらの墓前儀礼が追葬時や埋葬終了時に



第 50 図　墳丘周辺における儀礼の類例

修された儀礼の跡である可能性は高く、田村氏の想定した「酒宴」を含む墓前儀礼と、そこで使用した飲食器や貯蔵具・供膳具等を古墳前面に設けた施設（礫敷や土坑）周辺に遺棄する行為が、駿河東部地域の上位集団に共有された点は注目できる。

柏木善治氏は横穴墓も含めた墓前域における供膳儀礼の甕に着目し、儀礼終了時の破砕という「見せる儀礼」が、首長墳から下位の古墳へと展開した状況を指摘する（柏木 2014）。また青木敬氏は横穴式石室墳の墓前祭祀について、大容量の酒を貯蔵可能な甕の存在は、大勢の参集者が饗宴に参加したことを示すものであり、被葬者の後継者を含めた氏族集団単位による大規模な祭祀が行われたことを想定する（青木 2020）。

両氏の意見は、原分古墳のような地域内最上位の古墳において大量の甕が用意された事実とも親和性が高く、墓前儀礼そのものが、被葬者の集団内部での階層性が大いに反映されるセレモニーであった可能性は極めて高い。とりわけ、当地域の上位層の古墳では、大甕とともに、大型平瓶を象徴的に使用する点に特色があるといえよう。

無袖形石室の普及と墳丘儀礼　東海地域において墳丘前面や裾に土坑を設けた儀礼を行った例として、岩原剛氏は前述の原分古墳のほかに、美濃中部地域の船山北 3 号墳（各務原市）や三河東部地域の相生塚古墳（豊橋市）を挙げ、特に原分古墳については「駿河の首長が行った独自色の強い儀礼」と評価している（岩原 2020）。いずれも無袖形石室で修された儀礼である点も興味深く、地域を越え、同形の石室の被葬者集団に共有された儀礼を想定する余地もある。

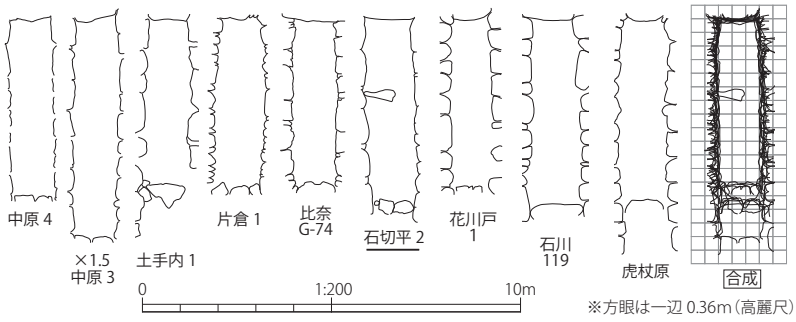
また墳丘前面に限らず、墳丘や周溝における甕を中心とした須恵器貯蔵具の破砕儀礼 (3) 自体は、当地域の無袖形石室では比較的導入期の例である中原 3 号墳や横沢古墳（TK209 型式併行期／遠江Ⅲ期後葉）において既にみられるほか、飛鳥Ⅰ後半以降では二タ子塚 2 号墳、東平 1 号墳、須津 J-6 号墳、千人塚古墳、船津 L-210 号墳、船津 L-62 号墳など、上位層から中間層の無袖形石室墳を中心に、枚挙に暇がない。

墳丘や周溝出土の土器については、古墳の築造に関わる儀礼や追葬時の儀礼など、様々な用途があったことが想定されるが（岩原 2020、荒井編 2025 など）、当地域における無袖形石室の普及とともに、墳丘周辺の儀礼も広がったことを想定したい (4)。

3　比奈古墳群の集団構成と被葬者像

（1）比奈周辺の古墳群とその構造

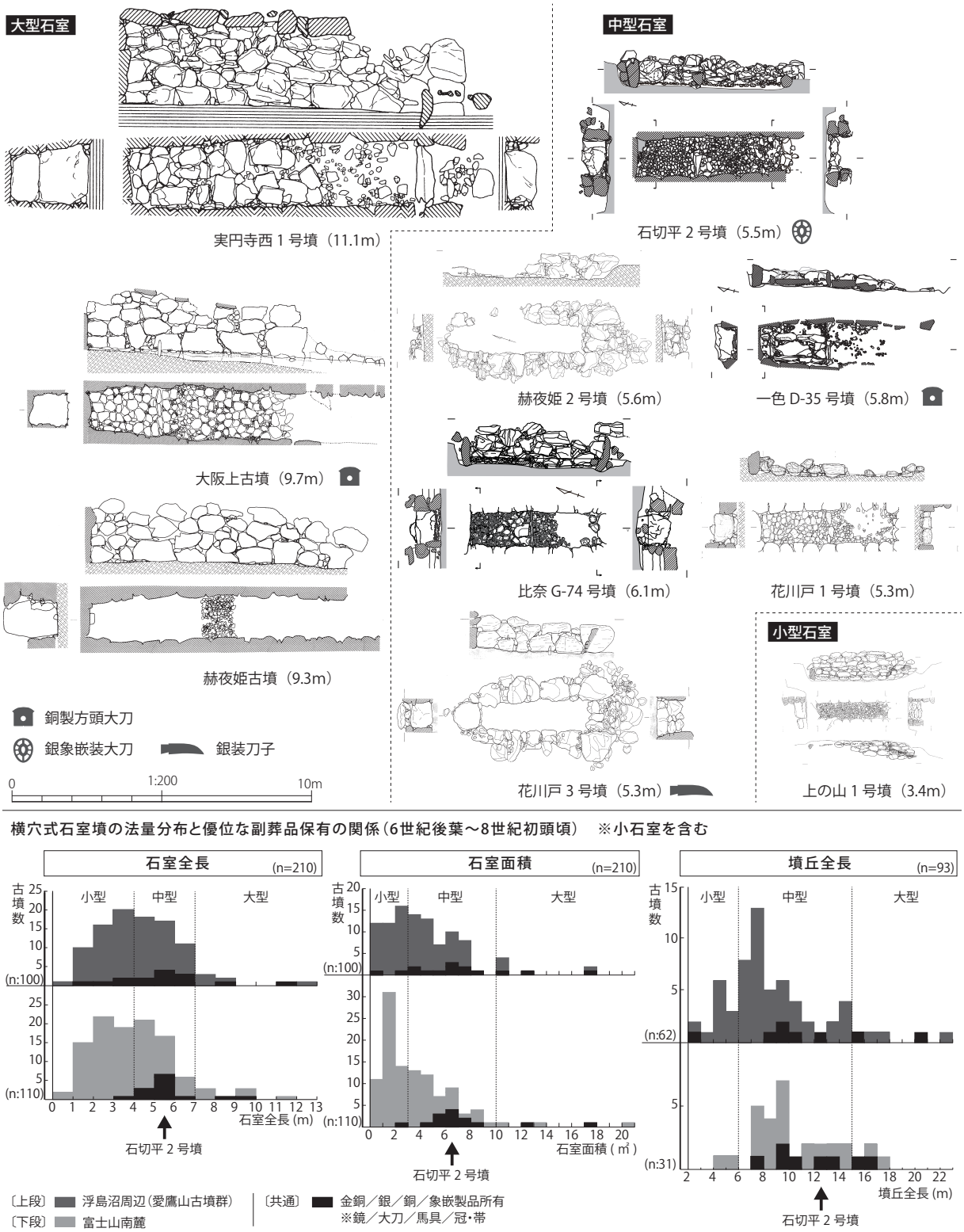
駿河東部地域の石室階層秩序　駿河東部地域において盛行した横穴式石室は、平面プランの細部には矩形や胴張形等の別があるものの、大多数が無袖形であり、全長 7 m以上の大型石室を上位とした石室規模による階層秩序が存在する（藤村 2022a・b）。同地域の横穴式石室墳の統計データに照らせば（**第 52 図下段**）、全長 5.5m、床面積 6.93 ㎡を測る石切平 2 号墳の石室は、規模としては中型でもやや上位に位置付けられる。推定径 12.5 mとなる墳丘長も、中型の上位とみてよい。また石室の平面プランは小型矩形の企画を採用するが（藤村 2022a・b）、これは 1 尺＝ 0.36 mの高麗尺換算では奥壁幅が約 3 尺を指向する企画となる（**第 51 図**）。一方で実円寺西 1 号墳（奥壁幅約 5 尺）、東平 1 号墳や大塚団地 1 号墳（同約 4 尺）のような大型矩形の一群が存在することから、平面企画上も最上位の類型とはいえない。



第 51 図　小型矩形平面企画の類例

以上の検討から、石切平 2 号墳は駿河東部地域全体でみれば、中型でも上位クラスの墳丘と石室であると評価でき、大型石室に葬られた指導者層を地域内で支えた、中間層の中でもやや上位の人物がその被葬者としてふさわしい。

比奈古墳群の指導者層の古墳　石切平 2 号墳が属する比奈古墳群とその周辺の古墳に目を転じると、指導者クラスである大型石室が実円寺西 1 号墳、大坂上古墳、赫夜姫古墳の 3 古墳に採用されるが、比奈古墳群においては後 2 者の古墳が 7 世紀代の盟主



第 52 図　比奈古墳群周辺における横穴式石室の階層秩序

的な古墳とみてよい。大坂上古墳（吉原市教委 1958）は全長 9.7 mの石室を有する径 17 m程の円墳であり、在地の大型五角形鏃を中心とした鉄鏃群とともに、宮都周辺の工房で製作された銅製方頭大刀の出土が知られる。被葬者は 7 世紀中葉から後葉頃に倭王権や東国の首長層らとも交渉できた、比奈古墳群の集団内では最上位の指導者とみて相違ない。また赫夜姫古墳（富士市教委 1988）は全長 9.3 mの石室を有する径 15 mの楕円形墳であり、被葬者は多量の在地系の腸抉五角形鏃とともに、馬具の轡や当該期では希少な鉄製紡錘車を保有する。副葬品の特徴からは、7 世紀中葉頃に馬の飼育や交通、紡織に関わる手工業などを管理した、より地域に根差した指導者の姿が窺える。

石切平２号墳の被葬者像　石切平 2 号墳の築造の契機となった被葬者は、上記 2 古墳に葬られた指導者たちと同時代を生きた人物と考えられる。墳丘や石室の規模からは、上記の指導者層を支えた中間層の中でも、やや上位の人物であったことが窺えるが、銀象嵌装大刀や総数 37 点を数える多量の鉄鏃を保有する特徴からは、有事の際には一定規模の軍事集団をまとめるような武人的性格の強い人物であったと考えられる。駿河東部地域では銀装・金銅装等の各種装飾付大刀や銀象嵌装大刀が各地に分散し、中型石室の階層にも一定量普及することから（**第 52 図下段**）、各古墳群の集団や個人レベルで、倭王権を構成する有力氏族と直接関わり、その恩恵を受けたケースが多かったとみているが（藤村 2023）、石切平 2 号墳の初葬者についても、軍事や交通路の管理等（藤村 2022c）への功績から、銀象嵌装大刀を王権から下賜されるに至ったと考えられる [(5)]。

また、平根系の大型五角形式や長三角形式といった象徴的な鉄鏃を中心に、多数の平根鏃主体となる鏃群や飾弓の存在に注目すれば、比奈古墳群の集団内でも狩猟や軍事に関わる儀礼に精通した被葬者の性格も窺える。さらに、30 点以上の鉄鏃の保有が鉄鏃の生産や流通との関わりを示すとする意見を参考にすれば（尾上 1993）、石切平 2 号墳の鉄鏃保有量は比奈古墳群内では突出して多く、同集団内において被葬者が武器の生産や地域内流通に携わった可能性がある。

比奈古墳群周辺の集団の構造と特色　7 世紀の比奈古墳群は、大坂上古墳と赫夜姫古墳を築いた人物とその家族集団を核として、彼らを支えた人々が丘陵一帯へと中型石室や小型石室を有する小円墳を 40 基前後築くことで、古墳群が展開していったと考えられる（**第 52・53 図**）。なかでも石切平 2 号墳の被葬者のような中間層の中でも上位の人物が、軍事や儀礼、さらには手工業分野において集団内部をまとめる役割を果たすことで、指導者層による集団の統率や経営が円滑化されていったのであろう。

集団内部における中間層の果たした役割を考える上で、当地域では渡来系移住民の動向も見過ごせない。富士岡古墳群内の中型石室である花川戸 3 号墳（富士市教委 2003）では、銀製の鏥を伴う銀装刀子や当地域では希少な畿内系土師器の杯等とともに、銅釧が 2 点出土しており、被葬者の渡来系移住者的な性格を想起させる。また、銀象嵌装大刀・剣や多量の鉄鏃とともに、鍛冶具の鉄鉗をはじめとする手工業関連遺物が豊富に出土した伝法古墳群の中原 4 号墳も、6 世紀後葉の事例ながら渡来系移住者の可能性が濃厚な被葬者であり（富士市教委 2016）、中型石室の被葬者には渡来系集団の指導者クラスが含まれていた蓋然性はかなり高い。7 世紀後半から 8 世紀初頭頃には、一色古墳群中の一色 D-35 号墳のような中型石室の被葬者にも、方頭大刀や銅製腰帯具を保有する人物が確認できることから、比奈地区周辺の集団からも、富士郡家に出仕して政務を司った郡領氏族の一角を担うような人物を輩出するようになっていたのであろう。

浮島沼ラグーン沿岸の開発と古墳築造集団　比奈 1 古墳群が位置する浮島沼ラグーン沿岸では、7 世紀前半の倭王権中枢へのカツオ製品の貢納拠点とみられる稚贄屯倉の設置（王領化）と前後して、愛鷹山南麓には 1,000 基以上の大型群集墳である愛鷹山古墳群と、海浜部には中原遺跡に代表される複合的手工業・水産加工拠点の集落群が成立する（藤村 2022a・藤村 2024a）。渡来人を含む地域開発・技術者集団が倭王権の主導により新たに組織されたことで、原東海道と原東山道を結ぶ東国経営上の要衝でもある富士山麓から浮島沼沿岸の開発が推し進められたと考えられる。

また比奈周辺の古墳群の石室開口方向の先に注目すると、古墳参詣の道である墓道を通じて、浮島沼沿岸の集落と接続することがわかる。比奈古墳群に近い根方街道沿線には祢宜ノ前遺跡や宇東川遺跡、沖田遺跡が立地するほか、浮島沼を挟んだ対岸には三新田遺跡が立地しており、これらの集落が比奈古墳群の被葬者集団の経営母体であった可能性は高い。周辺集落も含めた建物群の分析成果を援用すれば（藤村 2024b）、7 世紀の集落は主屋となる竪穴建物の規模や掘立柱建物を含めた建物構成により、集落内や集落間の序列化が進行したとみられ、先に見た墓域における墳丘と石室の規模や副葬品による序列化・組織化とも連動した現象とみてよい。その背景には、倭王権によるミヤケの設置や王領化の影響を想定しておくべきだろう。

4　おわりに

本稿ではまず石切平 2 号墳の古墳儀礼について、石室構築儀礼、第 1 次床面上での初葬、同追葬、第 2 次床面上での追葬と墓前儀礼という大きく 4 段階に復元し、それらが 7 世紀中葉から後葉（飛鳥Ⅱ～Ⅲ／遠江Ⅳ期前葉～後葉）にかけて実施されたと考えた。墓前儀礼については、駿河東部地域のほぼ同時期の上位集団の古墳間で共有された墓前域における

第 53 図　6・7 世紀の浮島沼西岸の景観と古墳群

饗宴儀礼に伴う痕跡と評価し、当地域における無袖形石室の普及とともに、同様の墳丘周辺の儀礼が展開した点を指摘した。そして石切平2号墳の墳丘や石室規模などが、統計上は駿河東部地域の古墳の中では中型でも上位クラスであると評価し、比奈古墳群内の大坂上古墳や赫夜姫古墳といった大型石室に葬られた指導者層を、軍事面や各種儀礼、手工業分野等で支えた人物を被葬者として想定した。さらに、墓域や居住域において集団内部の序列化・組織化が進行した背景には、浮島沼沿岸におけるミヤケ設置と王領化が影響を及ぼしたことを指摘した。

浮島沼沿岸では、石切平2号墳の被葬者のような人物の下、有事の際には自前で装備を調達し、兵として出奔できる生産技術を有した軍事集団が広く展開しており、彼らが原東海道の交通網の管理や、山間部では街道で使役される馬の生産・飼育、海浜部ではカツオ製品の生産などを手掛けたことで、一大古墳密集地帯を形成するに至ったとみられる。

石切平2号墳の墳丘や石室は、残念ながら現代社会における開発工事との折り合いの中で姿を消すこととなったが、その出土品は今後も末永く保存・活用し、当古墳や比奈古墳群の史的価値や評価を更新し続けることで、改めて現代の社会に対して、その成果や価値を還元していく必要がある。

（藤村　翔）

註

(1) 埋葬位置の復元にあたり、単体の被葬者を身長1.6ｍと仮定して検討・図化した。

(2) 第1次床面出土の鉄製鋲（140）は東側仕切石からの出土に対して、第2次床面出土の鉄製鋲（141）はＤ区一括遺物であった。床面を隔てても比較的近似した位置にて鋲が検出されていることから、当古墳の被葬者集団は、床面の敷き直しを経ても、副葬品を元の位置へ戻そうとする意識は比較的高かったとみている。

(3) 墳丘周辺で出土する大甕について、佐藤渉氏は関東北部の事例より、墳丘を装飾するための配列・配置儀礼の存在を想定するが（佐藤2019など）、当地域では瓶類を伴う割合が高いことから、饗宴や供膳儀礼として認識している。

(4) 無袖形石室の床面を、主として埋葬者を配置する奥半部と、土器の配置や通路としての機能がある前半部（開口部側）に区分する意識も、無袖形石室（「駿東系石室」）の展開とともに広がったことが田村隆太郎氏により指摘されている（田村2020など）。

(5) 大谷宏治氏も銀象嵌装大刀を保有した被葬者の性格については総じて武人的な様相が強く、交通の要衝に位置する古墳が多い点に注目する（大谷2024）。

参考・引用文献

荒井 啓汰　2022「東日本の横穴式石室における埋葬方法－人骨出土状況の検討を中心に―」『先史学・考古学研究』第33号　筑波大学

荒井 啓汰編　2025『葬送儀礼からみた6・7世紀の下野地域』栃木県立博物館調査研究報告書　栃木県立博物館

青木　敬　2020「横穴式石室における土器祭祀の変容と特質―松本平を中心に―」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社

岩原　剛　2020「横穴式石室墳の葬送儀礼―豊橋市相生塚古墳の調査成果をもとに―」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社

岩松　保　2006「古墳時代後期における葬送儀礼の実際」『京都府埋蔵文化財情報』第99号　京都府埋蔵文化財調査研究センター

大谷宏治　2024「圏線C字文系象嵌鍔付大刀の特質」『三河考古』第33号　三河考古学談話会

尾上元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』40（1）　考古学研究会

柏木善治　2014『埋葬技法からみた古代死生観－6～8世紀の相模・南武蔵地域を中心として－』雄山閣

佐藤　渉　2019「群集墳の大甕儀礼－群馬県西部を中心に－」『Archaeo-Clio』第16号　東京学芸大学考古学研究室

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』調査報告編

田村 隆太郎　2008「原分古墳における埋葬と儀礼」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

田村 隆太郎　2020「空間利用からみた遠江・駿河の横穴式石室の普及」土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社

日高　慎　2008「後期古墳における刀類立てかけ副葬について」菅谷文則編『王権と武器と信仰』同成社

富士市教育委員会　1986『実円寺西古墳保存修理工事報告書』

富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』

富士市教育委員会　2003『花川戸第2･3号墳発掘調査報告書』

富士市教育委員会　2016『伝法 中原古墳群』

藤村　翔　2022a「愛鷹山古墳群の被葬者集団とその生産基盤―駿河東部地域の大型群集墳―」『須津 千人塚古墳』富士市教育委員会

藤村　翔　2022b「東海―駿河東部地域を中心に」『季刊考古学』160（横穴式石室からみた古墳時代社会）　雄山閣

藤村　翔　2022c「『原東海軍』の地域集団と武器」『甲斐の勇者―その原像を探る』第39回特別展図録　山梨県立考古博物館

藤村　翔　2023「駿河・伊豆地域における古墳造営と地域開発―6・7世紀を中心に―」『古墳造営と地域開発』第4回考古学研究会合同例会・第61回東京例会　発表要旨

藤村　翔　2024a「古代駿河・伊豆地方における土師器塡の展開とその特質」三舟隆之・馬場基編『カツオの古代学―和食文化の源流を探る』吉川弘文館

藤村　翔　2024b「駿河・伊豆地域における古墳時代後期から飛鳥時代の集落動態」『東海における古墳時代後期から飛鳥時代の集落動態』第41回考古学研究会東海例会

吉原市教育委員会　1958『吉原市の古墳』